

博士論文（要約）

カンボジアの森をめぐる移動と交流
—カルダモン山脈と中央平野部の地域間関係史

石橋 弘之

本博士論文は、単行本として出版する計画があるため公表できない。5年以内に出版予定。

論文内容の要約

農学国際専攻
平成 21 年度博士課程入学
氏名 石橋弘之
指導教員名 井上真

論文題目 カンボジアの森をめぐる移動と交流
ーカルダモン山脈と中央平野部の地域間関係史

背景・課題・方法

21 世紀のカンボジアでは、内戦と政変からの復興と再生の時代から、内戦後の開発の時代へと移行し、市場経済化が進められてきた。開発が政治経済の中心地にあるカンボジア中央部から国境の山岳森林地域へと及び、人と自然の関係が急変するなか、現在の変化を、双方の地域の関係の歴史から理解する議論が展開されている。しかし、国家の担い手とされてきた多数派民族クメールが主に住む中央部の研究と、国家の周縁において少数民族が住む山岳森林地域の研究は別々に進められてきた傾向がある。さらに、中央部と山岳森林地域の関係は、「中心と周縁」の二項対立や政治的対立に還元して理解される傾向もある。

本研究は、カンボジア西方のタイと国境を接するカルダモン山脈を対象に、山岳森林地域に暮らしてきた人々が、近代から現代の歴史をいかに生きてきたのかを、中央部を対象とした研究も参照して明らかにする。

そのため次の 3 つの課題を設定した。(1) 19 世紀から 20 世紀中頃に、交易品カルダモンの産地が形成された過程を、植民地史観と本質主義に基づいて解釈した研究を再考し、同時代に中央部の政治体制が交易を基盤とする国家から植民地体制へ移行した背景をふまえて明らかにする。(2) 20 世紀後半に、ポル・ポト政権下の強制移住先から人々が帰村した事実が生活再建を基礎づけ、社会再生を方向付けたことが明らかにされた中央部農村の状況とは異なり、内戦の主戦場となったカルダモン山脈において、森の中に逃れた人々は帰村が困難となり各地を移動した状況をふまえて、避難生活から生活再建までの過程を明らかにする。(3) 21 世紀初頭の市場経済化、国家制度の浸透、自然環境の急変への人々の対応を、内戦後の新たな現象として捉えるだけでなく、それまでの歴史をふまえて明らかにする。

資料は、聞き取り調査で得た口述資料、現地調査で得た民族誌的資料、文献調査で得た文書資料を用いた。これらの資料を、人々が語る多様な歴史を解釈する方法と、同時代の同地域に出所をもつ資料を照合して歴史事実を把握する方法を用いて検討した。調査地はバットバン州 (TT 区)、ポーサット州 (OS 区)、コッコン州 (RC 区) と近隣の行政区の集落に位置する。2007 年から 2013 年にカンボジアを断続的に訪問して計 26 か月滞在し、この間にカルダモン山脈の調査地に 12 か月滞在した。

以上の課題を 3 部構成、全 9 章で検討した。

第 I 部では、カルダモン産地の形成過程を、開拓の伝承と、栽培による産地の拡大から検討し、その生産に関わる制度を、国家制度と現場の指導者に関わる側面から検討した。

第 1 章では、開拓の伝承を検討した。先行研究により産地の開拓は古代アンコール地域に遡ると解釈された伝承は、20 世紀の国民統合の言説の影響を受けていることが示唆された。この他の伝承は、19 世紀までの戦争と交易、20 世紀初頭に植民地行政が奨励したカルダモンの栽培の記憶を反映することが示唆された。伝承内容は、1) 王の遣いの猟師とトラとの交渉、2) 猟師と森の持主との民族間の交易、3) 仏領行政から支持を得た森林官による栽培に分類できた。開拓過程の特徴は、a) 上位の政治的権力の支持、b) 河川流域の森での集落開拓、c) 集落を包含する「里」の形成、d) 人の命や生活との引き換えを伴う「里」に関わる霊の祭祀の創始、に整理できた。

第 2 章では、栽培による産地の拡大を検討した。19 世紀末以降、植民地行政は、現地の人が華人と交易していたカルダモンに商業的価値を見出し、栽培を奨励した。未開拓地への新規の移植、そして既存の開拓地での移植を経て産地は拡張された。

第 3 章では、生産に関わる制度と国家制度との関係を検討した。19 世紀末までは、物納税制のもとでカルダモンを貢納した役職が階層化され、最末端の役職は産地の現場にいた。19 世紀末以降、仏領行政が物納税制を廃止した後、一部の慣行は 20 世紀以降も存続した。OS 区周辺では、1) 特定の居住地に住む人々が、特定の森でカルダモンを採取し、2) カルダモンを採取する日程を決める過程に「祭司」が関わった。一方で、19 世紀末に、シヤム領下にあった TT 区では、貢納者が徴税を拒否して反乱を起こし、行政に鎮圧された。

第 4 章では、生産に関わる制度と現場の指導者との関係を検討した。特定のカルダモンの森を後継する持主が、解禁日を定め、儀礼を執行した。この慣行は、20 世紀中頃までの政治体制の転換に伴う外部状況の変化と、指導者の後継をめぐる現場状況に人々が対応した過程で形成され、その過程で指導者と行政との関係に地域差も生じた。

第 II 部では、内戦の開始から終息までに、森の中に逃げた人々が避難生活を経て生活再建を進めた過程を、社会の形成、食料の調達に関わる側面から検討した。

第 5 章では、社会形成の過程を検討した。内戦中に森に逃れた人々は OS 区に主に住む。そこで、OS 区の人々を主な対象に、個人間の関係、集団、集落、「里」を形成した過程を検討した。人々は親族関係だけでなく擬制的親族関係を同郷者や異郷者とも築き、離別した人々との関係の欠損を補った。S 爺という人物が避難を先導し、反政府勢力兵と一般の人々が同行した。人々は S 爺に「紛争から中立」の立場を見出し、この立場が共有された結果、S 爺を指導者とする集団は形成された。内戦終息時、S 爺は、OS 区のカルダモンの

森の近くに集落を開拓し、死後に「里の霊」として祀られた。

第 6 章では、食料調達のプロセスを検討した 森の中の避難生活で水田稲作は制約されたが、移動先での動植物の採集・交換により食料不足は免れた。内戦時に種籾の一部が紛失した例もあり、内戦終息時は、定住先で農地だけでなく、種籾も取得する必要があった。

第 III 部では、内戦終息直後に、保護地域の設立を経てカルダモンの利用に地域差が生じた背景を検討した。その上で、内戦終息から約 10 年後に、開発事業の着工に対応した人々が地域間を結ぶネットワークを形成した動きを検討した。そして、市場経済の浸透に伴い地域内部の共同性が変化した背景を検討した。

第 7 章では、カルダモンの利用に地域差が生じた背景を検討した。1990 年代の内戦終息を経て保護地域が設立された後、内戦下で中断されたカルダモンの利用を、儀礼も含めて再開したのは OS 区のみであった。それは、1) 内戦後の居住先がカルダモンの森と近接しており、2) 儀礼を再開した S 爺は、森の持主の系譜ではなくとも、他地域の森の持主から能力を認められており、3) 儀礼の後継者が解禁日を定める慣行を続け、4) NGO がカルダモンの販路開拓を支援したからである。一方で、野性動物取引の流行後、解禁日の違反者を「トラが嘔む」信仰は弱化した。

第 8 章では、開発事業の着工に対応した人々が地域間を結ぶネットワークを形成した過程を検討した。2010 年前後、保護地域と重複する土地でダム開発や農園開発が着工された。対象地の指導者たちは先住民運動に参加し、保全活動に関わる NGO や省庁と協力を試みた。その結果、カルダモンの利用を再開していた地域と未再開であった地域を結ぶネットワークが形成され、カルダモンの森の歴史と現状を把握する地図作成活動に展開した。この活動で、過去のカルダモンの森と、現在の保護地域、地雷原、開発用地の重複が確認され、対応案が話し合われた。

第 9 章では、市場経済化の浸透に伴い地域内の共同性が変化した背景を検討した。2010 年前後、商品農作物の普及に伴い、収入源は交易用の森林産物から商品農作物へ、食糧は自給米から市販米へと変化していた。さらに、天候不順が発生し雨季と乾季の周期が乱れていた。この状況に一般の人々や移住者は生業の周期を早めて対応した。その結果、季節、生業、儀礼の周期に齟齬が生じ、生業の解禁時期に従うかどうか、つまり、集団の慣習と個々の生活のどちらを重視するかで立場の違いが表面化した。この状況は、過去に比べて今は「サマキー」（団結・協力）がないと表現された。この表現は、内戦以後、商取引対象の自然資源の拡大と消失が進み、資源を利用する際の 1) 現金使用の有無、2) 自己と他者との関係、3) 生活の単位、4) 自治の主体が変化した状況を表していた。対象地の人々は、人間だけでなく、霊的存在も含めて「持主」と考えて、資源を利用してきた。しかし、資源の競合が高まり、持主に依頼や告知をせずに物を取るの「盗み」とする考え方は弱体化していた。この点も「サマキー」が変化した背景にあった。

結論

カルダモン産地の開拓の文脈をふまえると、開拓者が移住前にいた地域だけでなく、移住後に産地の現場で開拓をいかに進めたのかを知ることも重要である。近代の歴史的な文脈をふまえると、開拓の背景には交易を基盤としてきた国家を担った為政者の商業的関心もあった。しかし、猟師が開拓先の森で動物や霊と交渉して人の命や暮らしと引き換えにカルダモンを得てきた伝承は、商業的側面に還元できない交易の観念を示唆した。

内戦下の森に逃げた人々は、既知の人だけでなく、未知の人と出会い、反政府勢力下にもありながらも「紛争から中立」の立場を共有する集団を形成し、同郷者と異郷者が共住する集落を形成した。その集落は、出身村ではなく、カルダモンの森の近くに開拓された。

内戦後はカルダモンの利用に地域差が生じながらも、開発に対応する過程で人々は地域間で連携するネットワークを形成した。そこではカルダモンを利用してきた歴史的背景をもつ人々が、先住民の権利を主張する現代的文脈のなかで交流した。この点は地域間に共通する資源に注目することによって、内戦後の変化に対応する人の移動と交流を、内戦前からの歴史をふまえて理解することの重要性を示す。一方で、地雷原、開発、保護地域の規制は、人々の生活圏を狭め移動を制約した。それゆえ、内戦前後の移動の内実は変わった。そして、市場経済が質的に変化するなかで、自然資源の共同利用は難しくなっていた。しかし、交易品の産地に住む人々は、人間以外の存在も、持主であると考えて交易をしてきた歴史を現在も語る。この点は内戦後の市場経済が他者への意識のもち方を弱めていると認識される状況を、交易品の産地の歴史から再考する上で示唆を与える。